

講演 2

「F T A以降の韓国における農産物の流通および価格の動向」

江原大学農業資源経済学科

教授 李 炳 昨 氏

私は農業経済学専攻なので、主に韓国のF T A以降の農産物の流通、または価格、または消費の変動について、最近の事情を説明したいと思います。

まず韓国は、この十数年間、非常に熱心にF T Aを結んできました。韓国はなぜ、F T Aにそんなに熱心なのか、それをまずご説明いたします。すでにもう54カ国とF T Aを結びましたが、重要なことだけ選んで、特に農業部門に関してF T Aの交渉をうまくやってきたのか、それに触れてみましょう。

その次に、一番最初に結んだF T Aはチリですけれども、それから10年を超えました。したがって長い関税移行期間もすでに切れ、全部、関税がゼロになっています。それで影響が出始めているんですね。それが今、どうなっているのか。

第3に、EUとのF T Aは4年、アメリカとのF T Aは3年たっています。関税が徐々に下がっていますけれども、その影響はどうなのか。

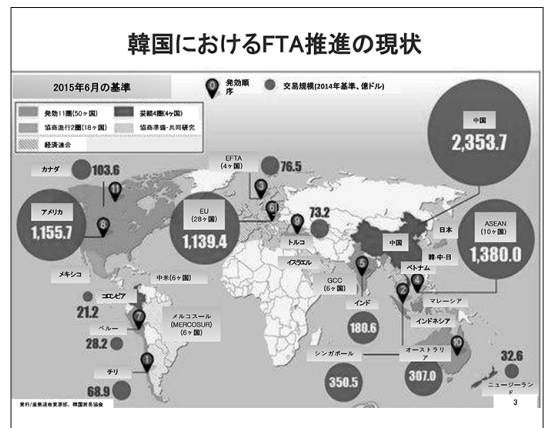
第4に、F T A以降、輸入農産物の流通はどう変化しているのか。それと、輸入農産物の代替効果は本当に大きいのか。われわれがミクロ経済で学んだ、それ以上の効果が出ているのかの実態です。

最後に、F T Aの恩恵は誰が受けているのか。F T Aは英語で、Free Trade Agreementですけれども、F T Aというのは、全ての人に恩恵がなければならぬ。しかし、実際はそうではない。果たして、誰のためにF T Aを結んだのか。そういう観点で調べてみたいと思います。

結論は、詳しくは言えないですけれども、これからどうしたらいいのか、そういう観点でまとめたいと思います。

これは最近の時点で、韓国が世界各国とF T Aを結んだ状況です。ナンバーが付いていますが、例えば、チリが1番とか、シンガポールが2番とか、最近、中国と結んで、まだ発効までは至っていませんけれども、いずれにせよ締結したF T Aは、国会を通ったら発効になりますので、間もなくのことだと思います。(スライド①)

スライド①



この発効と妥結を合わせたら、現在15の経済圏、54カ国とF T Aを結んでいます。韓国の貿易全体に占めるF T A締結国の割合は64%です。例えば、10年、15年たてば関税が徐々に減りま

すから、その国の割合はどんどん高くなると思います。

特に輸出に占める割合は72%、輸入は56%です。これは、韓国経済は輸出依存度が高いから、輸出しやすい国とFTAを結びます。それが数字にあらわれています。

ちなみに、韓国は、どうしてFTAにそんなに熱心なのか、そこには2つの理由があります。1つは、韓国は輸出依存度が高い経済構造になっていること。輸出額と輸入額を合わせたのを貿易額といいます。韓国のGDPに占める貿易額は、今90%です。おそらく日本は30%にならないと思います。中国もそうです。だから、韓国経済は輸出依存度がかなり高い。これは決していいことではないです。でも、現実ですから、韓国としては、こうしてFTAを結んでいく状況の中で孤立はできない。韓国経済はそういう危機意識が働いた、それが1つです。

もう1つは、産業の改革が絡んでいます。今まで韓国は途上国ということで、日本に教えてくださいといえ、すぐ教えてくれました。しかし今は、先端の技術は教えてくれません。中国もそうです。これからどうしたらいいのか。なかなか自分の手で改革できないのです。それで政府としては市場開放によって、何とか韓国企業の体質をもっとグローバルにして、もっと競争力をつけるような戦略があると思います。

しかし、これは貿易全体のことで、韓国の農産物の中で輸出できるものはあまりありません。主に、輸入の割合の約10倍、輸入のほうが多いです。特に、農産物の輸入に関して韓国が主に輸入している国の割合は、アメリカは4分の1、中国15%、ASEAN14%、EUが11%、この4つの経済圏だけでほぼ3分の2を占めます。その他、オーストラリア、カナダ、チリなどがありますが、これを全部合わせると78%になります。

TPP、中国とのRCEPなどありますが、韓国はとにかくこういうことは何でも

「はいはい」と受け入れる、そんなかたちになっています。だから、TPPも政情的な働きになると、おそらく申し込みをしたいと思います。

こういう状態で、例えばこれが全ての人、全ての分野にとってよければいいですけども、問題は特に農業に関しては非常に不利、または壊滅に状態であり、非常に心配です。また製造業の中でも中小企業などは非常にダメージを受けます。それをいかに賢くやっていくか、それが韓国の課題です。

それから、いくつかのFTAの農産物交渉の説明について、いろいろややこしいのですが、要約してみます。

チリから最近の中国まで一環してやっていることは、まず、韓国は、コメは解放しない、これが一つです。コメまたは、コメに関連する品目は、まず除外する。2番目、キムチと関連する野菜は、できるだけ移行期間を長くする。それは、ニンニクとか、唐辛子とか、タマネギとか、そんなものです。それは韓国の畑作に大きな影響がありますから、何とか保護するために、重要なことです。どこのFTAとの対応でも一貫しております。

果物と畜産は、安全性の問題があり、そう簡単に解放にできないということがありますが、例えば果物などは季節が反対の、南米やアメリカなどのものについては季節関税をして、何とか市場を保護するかたちを取っています。

畜産は、これも口蹄疫が発生したり、そういう国からは入れない分、そうではない国からは、できるだけ長く移行期間を設けるという戦略です。

例えば、チリは11年たっていますけれども、この時は初めてやったので、交渉の経験もなく、少し下手でした。その後、徐々にうまくなって、アメリカの段階ではいろんなことを工夫して、FTA交渉を行いました。チリのときは、いろいろ果物とか、豚肉とか、または加工品としてワインとか、トマトペーストとか、そういうもの

について危惧されましたが、11年たって、やはり実際にその品目がたくさん入ってきています。

平均的に見ると、韓国の農産物全体の関税率は非常に高いです。日本は10%にならないと思います。韓国は平均すると、60何%になります。特に、こういう食糧作物、大豆などは487%。そしてだいたい主要な穀物は300~500%。野菜は、例えば唐辛子は270%、ニンニクは360%、非常に高くしています。果物や野菜は、だいたい45~50%、畜産物は20~40%、乳製品はもう少し高くなっています。これが例えば、10年の移行期間を設けても、10年は実際にはすぐに過ぎてしまいます。この270%がゼロになりますから、韓国農業の将来は、非常に厳しいことが予想されます。(スライド②③)

スライド②

類型	品目数 (比重)	対象品目
除外	21 (1.5%)	米、りんご、梨
即時撤廃	224 (15.6)	種牛、種豚、配合飼料、小麦、種子、砂糖きび
DDA以降再論 (TRQを含む)	391 (27.3)	唐辛子、にんにく、たまねぎ、こま、麦、豆、豚肉(冷凍)、チーズ、ミカン、牛肉、鶏肉、クリーム
季節関税	1 (0.1)	ぶどう
16年以内	12 (0.8)	粉ミルク、混合ジュース(りんご、ぶどう)、茶
5-10年以内	783 (54.7)	花卉類、白菜、大根、コーヒー、ジュース、豚肉、トマト、にんじん、きゅうり、桃、キウイ、メロン

スライド③

類別	品目(関税率)
食糧作物	ビール麦(513%)、大豆(487%)、じゃがいも(304%)、じゃがいも澱粉(455%)、とうもろこし(328%)、とうもろこし澱粉(226%)
野菜	きゅうり(135%)、カボチャ(27%)、唐辛子(270%)、ニンニク(360%)、たまねぎ(135%)、しょうが(377.3%)、長ネギ(27%)、ごま(630%)、高麗人参(222.8-754.3%)
果実類	いちご(45%)、すいか(45%)
果物	オレンジ(60%)、柑橘類(144%)、キウイりんごなし(ぶどう、甘柿)(45%)
畜産物	牛肉(40%)、豚肉(22.5%)、鶏肉(18-20%)、卵(41.8%)、鴨肉(18-22.5%)、脱脂全脂粉乳(176%)、チーズ(36%)、バター(89%)、乳清(ホエイ)(49.5%)、蜂蜜(243%)

EUからは、豚肉、酪農製品が主な商品です。EUの国々、デンマークとか、オランダとか、ベルギーとか、豚肉を輸出する国が多いから、主に10年、または10年+ASG、これは農産物セーフガードのことです。

酪農製品も10年+TRQなど様々なものがある。TRQやASG、チリのとき見当たらなかった、新しい工夫した制度が入ってきています。

アメリカとEUは、実際は西洋ナシ、西洋リンゴが主体ですけれども、地域によっては、例えば、日本のふじ、または東洋系のナシ、農産地があります。もし、ふじや東洋系のナシが入れば、韓国産とぶつかります。西洋ナシは10年ですけれども、東洋系のふじや、ナシは20年で、2倍も移行期間を長くして妥結しました。

もう一つは、完全生産基準がありますけれども、EUはいろんな国があるし、EUのエリアに入っていない第3国もあります。アメリカやEUとのFTAでは、安全生産基準を適用しました。これは例えば、農産物の場合、EUならEUの地で種を植えて、EUの地で収穫したものはEU産として認めるというものです。もう一つは、地理的表示です。EUでは、ウイスキーとか、質のいいお酒がたくさんあります。これを適用しました。

アメリカとEUは似ていますけれども、問題は、アメリカは全ての農産物の生産大国だから、競争力を持っています。それが怖いところです。一応、アメリカもコメは阻害して、主にジュースとか、こういうのはすぐ関税がゼロになるかたちになっています。

5年以内に、1531品目のうち、約61%が無関税になります。しかし牛肉は15年+ASG、豚肉は10年、鶏肉は12年、こんなかたちで韓国の主要な品目は移行期間を少し長く設けたと、それが一つの努力といえは努力です。

オレンジとブドウは季節関税で、リンゴとナシは、EUと同じです。それ以外に、例えば、唐辛子とかこういうのは、高麗人参も18年と、

長く移行期間を設けました。

韓・米または韓・EU、FTAで、韓国がしたのが細番分離です。例えば、ジャガイモや大豆などは、生食用、生鮮のものがあるし、また加工用があります。加工用は、いずれ韓国は輸入しなければならぬから、細番分離して、これは安くして、これは高くすると、そんなかたちです。

さて、ASGと原産地についてです。アメリカの牛肉については、原産地の交渉で韓国が負けて、結局牛肉は屠蓄基準を受けることになりました。だから、アメリカの屠蓄場で屠蓄されたら、それはアメリカ産となります。だからアメリカは特にカナダと牛肉の取引が多いんですね。だから、カナダのウシがアメリカで屠蓄されれば、それはアメリカ産として韓国に輸出することになります。これは、アメリカとはまだ3年しかたっていないので、そのFTAの前に予測したモデルで計測したものによると15年たったら、だいたい関税がゼロになるから、被害が一番大きい時期です。その時点で、韓国のお金で約1兆2,000億ウォン、このうち、被害がたたくさん出る分野は畜産で約8,150億ウォンです。あとは、果物がその次、3,000億ウォンです。この8,000億ウォンに占める半分以上が牛肉です。これは韓・米FTAで、一番大きな被害を

スライド④

区分	年間			15年間		
	5年目	10年目	15年目	合計	1年平均	
穀物	206	249	295	3,270	218	
野菜、特作	608	742	853	9,828	655	
果物	りんご	599	672	760	9,260	617
	梨	396	454	498	6,052	403
	ぶどう	439	585	731	7,625	508
	みかん	865	730	730	9,569	639
	桃	150	221	221	2,671	178
	その他	66	72	72	965	64
合計	2,314	2,735	3,012	36,162	2,411	
畜産	牛肉	1,040	2,463	4,438	30,036	2,002
	豚肉	1,640	2,065	2,065	24,378	1,625
	鶏肉	589	1,087	1,087	11,557	770
	乳製品	297	430	430	5,305	354
	その他	91	143	173	1,718	114
合計	3,656	6,187	8,193	72,993	4,866	
農産物合計	46,785	9,912	12,354	122,252	8,150	

受ける部門は牛肉産で、次に豚肉、鶏肉。果物では、リンゴ、ブドウ、ミカンについて、大きな被害が出ると予測されます。(スライド④)

オーストラリアとは去年結んで、今年の1月1日で発効されました。オーストラリアはご存じのように、牛肉です。牛肉を15年というように持っていきました。あとは、だいたいオーストラリア、カナダと結んで、すでにカナダも発効されましたが、これはアメリカのときのFTAの結果と、だいたい似たようなかたちで妥結されました。(スライド⑤)

スライド⑤

譲許段階	主要品目	品目数
即時撤廃	豚、鶏、ヤギ、さくらんぼ、アーモンド、小麦(製粉用)、パーム油、ワインなど	254
3-5年	アスパラガス、チコリ、胡、パーム油、糖蜜(その他)、オートミール、白菜、トウモロコシ、でん粉、ソーセージ、サトウキビ糖蜜(その他)	287
7-10年 (ASG)	豚肉(チルド)、トマト、キャベツ、アブリコット、大豆油、ミックスジュース、ラム、インゲン、イチゴ、穀物、オリブオイルなど	385
12-15年 (ASG, TRQ)	バター・塊製造製品、冷凍クリーム、調剤粉ミルク、チェダーチーズ、豚肉(冷凍)、アボカド、カボチャ、牛肉(冷蔵・冷凍)	317
17-20年 (ASG, TRQ)	チキン(冷凍、冷蔵)、ニンニク、ニンジン(乾燥)、粟(冷凍)、トウモロコシ(ポップコーン用)、メロン、レモン、ニンニク(冷凍)、ミルク、	85
関税削減	麦芽(スモーク)、穀物、大豆など	12
季節関税	オレンジ、ブドウ、ジャガイモ、キウイ、マンダリン	5
現行関税+TRQ	大豆(もやし用)、大豆(その他)	2
除外	米、大麦、牛肉、豚肉(冷凍)、ミルククリーム、ジャガイモ、ネギ、スイカ、ニンニク、タマネギ、赤唐辛子、オレンジ、みかん、リンゴ、梨、蜂蜜、ビーナッツ、高麗人参	158

面白いことは、日本はオーストラリアとFTAを結んだとき、18年たっても冷凍肉の関税がゼロにならないようにしました。これは非常にうまくやったと思います。牛肉に関して、日本は最高の交渉をしたのではないかと思いますね。さて、韓国の政府に対しては、国内から大きな怒りが寄せられています。一体政府は何をしたのかと。結局、FTAは交渉、取引ですから、交渉次第なんです。しかし冷凍肉は23%、これは維持するようになっています。また、セーフガードを設けて、10年たったら再交渉するようになっています。その点は非常にうまくやったと思います。(スライド⑥)

スライド⑥

### 日本・オーストラリアFTAの牛肉交渉

(単位: %, 1,000トン)

冷凍牛肉			冷蔵牛肉		
年次	関税	セーフガード発動の基準	年次	関税	セーフガード発動の基準
FTA以前	38.5		FTA以前	38.5	
1年次	30.5	195	1年次	32.5	130
2年次	28.5	196.7	2年次	31.5	131.7
3年次	27.5	198.3	3年次	30.5	133.3
4年次	27.2	200	4年次	29.9	135
5年次	26.9	201.7	5年次	29.3	136.7
6年次	26.7	203.3	6年次	28.8	138.3
7年次	26.4	205	7年次	28.2	140
8年次	26.1	206.7	8年次	27.6	141.7
9年次	25.8	208.3	9年次	27.0	143.3
10年次	25.6	210	10年次	26.4	145
11年次	25.3		11年次	25.8	
12年次	25.0		12年次	25.3	
13年次	24.1		13年次	24.7	
14年次	23.2		14年次	24.1	
15年次	22.3		15年次	23.5	
16年次	21.3				
17年次	20.4				
18年次	19.5				

注: 該当年度の牛肉輸入量の累積がセーフガード発動の基準を超えると、翌月から関税率は再びFTA以前の水準である、38.5%に上がる。

中国とのF T Aは、中国側、韓国側は少し違うんですが、率直に言って、これはF T Aではないです。重要な品目が全部、除かれています。こういうF T Aもあるということですね。ほとんどの生の農産物は除かれて、加工品だけ取引できるようになかたちになっています。しかし、韓国と中国は近いから、加工品としても結局、原料農産物を使った加工品の貿易が拡大されれば、結局、間接的に農産物の市場に被害を与えると、私たちは予測しています。(スライド⑦)

スライド⑦

### 韓・中FTAの農産物交渉の結果

譲許類型	品目数	(%)	主な品目	
即時譲渡	216	13.4	牛(標識牛)豚(アヒル)、大豆(種子)、野菜の種子、羊毛、毛皮、パーム油、(食用)植物油、ライ麦	
5年譲渡	209	13.0	加工食品、パスタ、小麦、大豆オイル、酢	
10年譲渡	164	10.2	ワイン、ココナッツ、マヨネーズ、アーモンド	
小計	589	36.6		
15年譲渡	202	12.5	カレー、バナナ、パイナップル/スイートコーン(加工)、ポテトチップス、マシゴ、配合飼料、トマトペースト	
20年譲渡	239	14.8	果物(ジャム、ゼリー)、薬草、マニョク、落花生油、ホエイ、高麗人参の飲料、野菜(加工)	
小計	441	27.4		
TRQ	7	0.4	ゴマ、小豆、大豆、麦芽、サツマイモのでんぷん	
部分削減	平均20%	11	0.7	牛ムチ、混合調味料、ソース、小麦、シソ
130%削減	15	0.9	0.9	小麦、スイートコーン、コーン(種子)
除外	548	34.0	米、大麦、とうもろこし(ポテトコーン用)、ジャガイモ、牛肉、豚肉、鶏肉、粉乳、チーズ、蜂蜜、ミカン、リンゴ、梨、ぶどう、キウイ、カボチャ、唐辛子、ニンニク、タマネギ、高麗人参	
小計	581	36.1		
総合計	1,511	100.0		

それでは、韓国とチリは10年たっていますが、果たして、どう変わっているのかを見てみると、

まず、2004年にF T Aが発効されました。2003年はF T Aの直前の年です。データの関係で2013年と比較してみると、例えば、ブドウは韓国の輸入ブドウの中で、F T Aの前は約3分の1、今は71%を占めます。韓国全体ではなく、輸入ブドウの中では、チリ産が7割以上を占めています。キウイもかなり増えています。ワインも増えています。豚肉は今、そんなに増えない。なぜなら、E Uと競争するようになっていまして、そんなに増えない。しかし、果物では、チリ産がたくさん入るようになっていまして。(スライド⑧)

スライド⑧

### 韓・チリFTA10年: 農産物輸入の推移

(単位: 万ドル, %)

区分	2003	2008	2013	13/03(3倍)
農産物	2,183 (0.4)	10,905 (0.8)	26,866 (1.4)	12.3
- ぶどう	1,366 (35.1)	6,419 (58.2)	16,702 (71.1)	12.2
- キウイ	176 (7.8)	396 (6.9)	1,200 (27.6)	6.8
- ワイン	299 (6.5)	2,971 (17.8)	3,646 (21.2)	12.2
畜産物	3,053 (1.4)	9,249 (2.8)	11,444 (2.4)	3.7
- 豚肉	3,024 (15.4)	8,951 (10.2)	10,248 (11.2)	3.4
林産物	1,691 (0.9)	3,752 (1.3)	39,860 (6.1)	23.6
- 製材木	880 (6.0)	3,288 (11.4)	8,916 (16.5)	10.1
合計	6,926 (0.7)	23,906 (1.2)	78,169 (2.6)	11.3

注: ( )内の数字は韓国の総輸入の中でチリ産の輸入が占める割合を示す。  
資料: 文庫(2014), p. 2

その後、林産物、特に製材木に、またチリが入ってきています。

今、説明しましたが、輸入がこのように増えて、輸出ももちろん若干増えましたが、結局、農産物の貿易赤字は11.3倍に増加しています。最近、林産物の輸入は非常に大きくなっています。あと、主力の輸入品目は、ブドウ、豚肉、ワイン、キウイ。それ以外に、例えば、種とか、冷凍イチゴ、トマトペースト、こういうものも最近、増えています。

チリ産のブドウは、だいたい3月から5月の間に、全体の9割近くが入ります。季節が反対ですから、秋ではなく、韓国の春にたくさん入っ



てきます。これは今、貯蔵技術が発達して、1カ月、2カ月、倉庫で貯蔵できます。5月～6月に大量に出ますけれども、その時、韓国ハウス、施設ブドウが出荷されます。ぶつかるんですね。だから、秋のブドウなら問題ないですが、施設ブドウが今、韓国のブドウの生産業の約40%を占めています。施設ブドウがどんどん大きくなっているのに、チリ産が入ってダメージを受けるということになっています。もちろんこれだけではなく、その時期に出る、例えば韓国産のイチゴ、マクワウリとか、こういうものも売れない。

もう一つ指摘したいことは、チリとFTAを結ぶ前に、FTAの被害を計測したのが、約5,800億ウォンと、計量モデルの計測の結果が出ました。今年、新しく2004年から10年の間、被害を計測したら、もちろん費用がちよっと違いますけれども、似ています。この数字を見たら1兆1,000億ウォン、ほぼ2倍の差があります。これはモデルは少し違うとしても、こんな大きな差はどうして出るのか。今まで、2003年にわれわれ経済学者があまり考えなかったいろんな被害が実際には出ているということです。

先ほど指摘したように、輸入果物の非常に広い代替効果が出ている、これを過小評価している。それと、大手流通業者が、この輸入果物を一つの目玉商品として利用している。非常に安く売って、マージンを薄くしている。また、輸入商品に対する消費者認識がだいぶ変化している。食べてみたら、安いし、おいしいし、消費者の間でかなり抵抗がなくなりました。

それ以外に、チリならブドウとか、豚肉とか、そういうのは予想していましたが、チリは韓国にいろんなものを輸出できる、もうけることができる。新しい商品を開発して、どんどん輸出している。例えば、くるみ、ブルーベリー、今は牛肉も輸出しています。こういうことが実際に起きています。

EUは予想どおりに加工食品が多く、また畜

産物が大きく増えています。EUからも加工商品が増えているために、赤字を出しています。豚肉、乳製品などが大きいです。最近、イチゴジュースやオレンジジュース、こういうジュース類の輸入が非常に増えています。また、豚肉は先ほどございましたが、チーズとかは、これはナチュラルチーズですけれども、だいぶ増えています。

輸入特惠関税の活用率は、FTA交渉の対象品目として入っている。それを集中的に、EUが輸出するということです。これは関税を低くする方法を利用できますから、それでこういう品目に集中されるから、今は90%以上、特に豚肉、ホエイ、ワインとか、こういうところに集中されています。

EUから輸入が増えることにより、輸入単価の変化が起こります。今、4年たっていますが、豚肉とかは増えて上昇しましたが、加工チーズとかは、非常に値段が下がっています。このEU農産物の輸入価格の引き下げ効果を見ると、ここに示すようなかたちに出ています。(スライド⑨⑩)

## スライド⑨

### 韓・EU FTA4年：農産物輸入の動向

(単位：百万ドル、%)

区分	発効以前 (3年間の平均値) (A)	発効2年後 (2012. 7-2013. 6)	発効4年後 (2014. 7-2015. 6)	増加率 (C/A)
農産物	1,106	1,619	1,839	66.2
- 穀物	83	289	306	268.4
- 果物野菜	58	87	99	71.1
- 加工食品	957	1,243	1,433	49.7
畜産物	732	871	1,404	91.7
林産物	289	353	434	50.4
合計	2,087	2,843	3,676	76.2

註：発効以前の数字は、直前の5年間のうち最大値と最小値を除いた3年間の平均値。  
資料：池塚か(2015)、p. 2

18

## スライド⑩

## 韓・米FTA3年：農産物輸入の動向

(単位：百万ドル、%)

区分	発効以前 (2007-2011年) (A)	発効2年後 (2013年)	発効3年後 (2014年) (C)	増減率 (C/A)
農産物	4,336	3,637	5,089	17.4
- 穀物	2,787	1,442	2,760	-1.0
- 果物 野菜	328	616	610	85.7
- 加工食品	1,027	1,580	1,719	67.3
畜産物	839	1,471	1,878	123.8
林産物	795	853	843	6.1
合計	5,957	5,961	7,810	31.1

資料：韓協か(2015), p. 2

21

妥結したのはアメリカが先ですが、国会を通るのに4年かかったので、発効になったのはアメリカが遅いです。今、アメリカは3年たっています。主に、アメリカからは、果物、野菜が増えています。それから加工食品と畜産物が増えています。

アメリカからの輸入増加によって、貿易赤字は、このように増えています。全般的にアメリカ産の割合額の農産物の輸入、総額に占める割合は、やや低めですが、それでも4分の1です。発効以前と発効3年後の比較を見ると、果物の中ではチェリーが大きく増えています。ところが、チェリーの生産がないために、韓国の消費者は随分安くチェリーを食べようになりました。それはいいのですが、ブドウとかも増えているし、意外とチーズとかも多く入っていますね。やはり、アメリカからの農畜産物の輸入も、特恵関税の活用率が非常に高くなっています。特に、食肉、チーズ、チェリー、ジャガイモ、こういうのは特恵関税を十分利用しています。

輸入単価の変化に及ぼす効果を見ると、牛肉などは増えたり、上昇したりしています。例えば、これは鶏肉ですね、チェリー、ブドウとかは、下落の効果に働いております。

輸入農産物の流通に移ります。まず、輸入農

産物の流通経路は、主に大手の輸入会社から入ってきたら、卸売市場に行く経路と、一つは食品企業、加工業者行く経路の二つに分かれます。後で図が出ますけれども。

今まで韓国は、輸入農産物がそれほど多様で大きくなかったために、特別に輸入農産物の流通経路とか、流通市場が特別になかったんですね。しかし、今は非常に多くの農産物が出回って、量も多いから、それなりの市場が形成されるようになりました。特に最近では、大手流通業者が直接、自分のルートをつくって輸入するケースも増えています。例えば、アメリカからはオレンジ、オーストラリアからはニンジン、ヨーロッパからは乳製品を直接輸入することも増えています。

総じて、輸入農産物の流通マージンが国内産よりは大きい。これは後でまた出ます。

マージン率を2008年から2012年の5年間の平均から見ると、例えば、ブドウは輸入段階で9%、卸で16%、小売りで29%。オレンジもそうです。小売り段階のマージンが特に輸入農産物の場合、非常に大きいです。

国内産の農産物、品目ごとにいろいろ違いますが、全般的に韓国の国内産の農産物は、全体のマージンが40%内外です。輸入産は50%前後です。少なくとも10%以上、マージンが大きいことが分かります。それは、それぐらい流通業者がマージンを余計に取っていることがあります。

では、輸入農産物の流通マージンはどうして大きいのか。これにはいろいろ理由があります。まず、輸入構造にあります。ある品目は、向こうの輸出業者と契約を取って、独占的に輸入する会社があります。そういう場合は独占企業になってしまいます。自分が流通のマージンをたくさん取っても、それは誰もタッチできない。

もう一つは、非効率的な流通経路です。きちんとなっていない流通構造になって、輸入農産物の流通構造、または流通経路が、まだきちん

と形成されていない。今、過渡期ということです。

それから、不完全競争の流通構造です。最近、輸入農産物を扱う会社が2倍以上、増えました。韓国の輸入会社で。輸入会社が輸出国に行って、向こうで競争するんです。向こうの輸出業者は当然、価格を上げるでしょう。そういうこともあって、輸出国の段階から値段が上がってしまいます。

その次に、特に果物が非常に問題ですので、果物輸入の特徴について簡単に言います。果物の輸入量、または輸入額が非常に増加しています。年平均でも7~9%増えています。品目も主力はあまり変わらないですけれども、多様化されています。十何年前は、オレンジが40%、バナナが32%となっていました。最近ではバナナが1位です。オレンジ、またブドウ。ブドウの割合が非常に。チェリー、こういうのは、ブドウとチェリーが大きくなったのは、これはチリとアメリカです。

先ほど指摘したように、3月~5月に集中的に入ってきている。韓国産の果物は3月~5月に出る果物はあまりないですけれども、施設果物、または果菜類ですね、イチゴとか、ミニトマトとか、そういうのが売れなくなってくる、これが言えます。

一人当たりの消費量の変化を見ても、このように輸入果物の消費量が非常に増えています。年平均増加率が、国産はマイナスなのに、輸入だけ7.3%と非常に高いことが分かります。主に輸入業者から卸売り法人、仲買人、このように行くケースと、まっすぐ大手スーパーに行くケースがあります。

輸入果物と国産果菜類の消費の代替効果が品目ごとにどう起きるのか、これを図にしたものです。詳しいことは、これを参考にしてください。矢印は、いつから影響があると、両方、影響がある、お互いに影響がある、そういうこともあります。総じて、果物輸入量が10%超過す

れば、韓国産の果物の価格は、だいたい0.5~1.5%下落する計測結果が出ています。主に、輸入ブドウやチェリーは、国内産のスイカ、マクワリ、ブドウと代替。バナナとオレンジは、国産のナシや甘柿と代替することが分かりました。(スライド⑪⑫)

スライド⑪

**輸入果物と国内産果菜類の消費の代替関係**

- 果物の輸入量の10%増加 → 国内産果物の価格が0.5-1.0%下落。  
 - 輸入ぶどう、チェリー → 国内産のすいか、マクワリ、ぶどうを代替。  
 - バナナ、オレンジ → 国内産の梨、甘柿を代替。

季節	輸入果物による国内産果物の代替	国内産果物の間の代替
春	バナナ → すいか (-0.85) オレンジ → みかん (-1.38)、マクワリ (-0.71) 輸入ぶどう → マクワリ (-1.03)、すいか (-0.30)	いちご → マクワリ (-2.03)
夏	バナナ → ぶどう (-0.63) チェリー → ぶどう (-0.39)、マクワリ (-0.28)	すいか → 柿 (-0.68) マクワリ → ぶどう (-1.78)
秋	バナナ → りんご (-0.78) オレンジ → みかん (-0.41) 輸入ぶどう → 梨 (-0.38)、りんご (-0.15)	りんご → 梨 (-1.78) ぶどう → りんご (-1.13)、梨 (-1.18) みかん → りんご (-1.23)
冬	バナナ → 梨 (-0.46)、甘柿 (-1.04) オレンジ → 梨 (-0.68)、甘柿 (-0.78)	りんご → いちご (-2.67) みかん → りんご (2.55) 梨 → 甘柿 (-1.19)、いちご (-1.85) いちご → 甘柿 (-2.34)

注：1) ( )の中の数字は左側の果物の物量が10%増加した場合の、右側の果物価格の下落率%。  
2) 両方向の矢印は、両品目の間に共に影響を与えることを示す。

スライド⑫

**果物の消費変化の要因**

**経済変数の影響**

- 所得の上昇
- 果物の種類別相対価格の変化による代替効果
  - 国内産果物の消費の比重の減少 → 国内産価格の上昇と輸入価格の下落による消費の代替(1)、人口社会的な要因(1)
  - 輸入果物の消費の比重の増加 → 国内産価格の上昇(1)、人口社会的な要因(1)
- 果物の消費における人口社会的な要因の影響
  - 2005-2013年の間、韓国人の果物の消費支出額は年平均0.72%ずつ増加。
  - 人口の増加：果物の消費を年平均0.52%増加させるように寄与(1)
  - 高齢化：年平均0.22%増加に寄与(1)
  - 世帯人数の減少：年平均0.12%減少に寄与(1)、1人世帯の増加

**輸入果物に対する消費者の嗜好**

- 女性、30代以下の若い年齢層、1人世帯で嗜好が高い。
- 輸入果物が嗜好される理由
  - 糖度が高く、味とともに健康機能性が高い(ブルーベリー、キウイ、グレープフルーツ)。
  - 取扱いの簡便性や食べやすさ(バナナ、チェリー、輸入ぶどう)。
  - 品質(オレンジ、マンゴ、ハインアップル)
- 酸味があったり、果肉が柔らかい。
- 世帯の所得水準とは有意な関係が認められない。

資料：李ほか(2015)、p. 306.

果物消費変化の要因を見ると、先ほど若干触れましたが、まず所得の上昇も。これはもちろん経済変数です。それ以外に、相対価格の変化による代替効果もあります。いろいろお互いに影響を及ぼす。それ以外のこと、非常に感化しやすいことですけれども、こういう人口社会的な要因がまた影響を与えています。例えば、高齢化や世帯人数が減少する、そういうことも果物の消費に影響を与える。これがまた輸入果物



## スライド⑬

の消費に影響を与える。またそれが、国産の果物の消費に影響を与える。そういう連続の効果が出ています。

特に、輸入果物に対する消費者の選好です。特に、女性が好きです。また、30代以下の若い年齢層が輸入果物に対する抵抗がない。また、増加している一人世帯についても同様です。安いですしね。輸入果物がなぜいいのか聞いてみたら、糖度が高く、健康にもいい、そういう果物が輸入品の中に多いです。例えば、ブルーベリーとか、キウイとか、グレープフルーツ。それから、食べやすいとか、そういうこともあります。バナナとか、チェリーとか、輸入ブドウは皮まで食べるし、種もないし、甘い。また品質、グレープとか、一部の果物は酸味があるんですね。果肉が柔らかい。これに対して所得が高いと、もっといいのかというと、そういうことはありませんでした。だから、所得は関係なく、輸入果物はみんな好むことが分かりました。

マージンは先ほど若干触れましたが、品目ごとにありますけれども、輸入ブドウだけ見ても、輸入段階、卸売り、小売り、小売りが非常に大きいことが分かります。これは詳しく、オレンジもあります。これは見せなかったんですけども、このように輸入と国産価格の変化とか、これをその後の表で要約してあります。

主に、この後ろに全般的なマージン増加に影響するのをまとめました。ブドウだけを見ますと、チリとのF T Aによって、輸入ブドウの付加される関税が引き下げ、今はゼロですけどね。それによって購入価格は下落します。小売り段階で、その分、マージンが増加する。これがもっとふるべきですけど、このマージンが大きく増加して、消費者がF T A以前より上昇してしまうことが起こって、常識的に理解できないことが起こります。(スライド⑬)

## 流通業者のマージンの増加

## ぶどう

- F T A以降、チリぶどうの輸入流通業者の卸売-小売流通マージンが増加。しかし、国内産ぶどうの流通業者の卸売-小売流通マージンは減少。
- ▶ 韓-チリF T Aによって、輸入ぶどうに賦課される関税が引下され、導入価格は17%下落したが、小売段階で中間輸入流通業者のマージンがやや増加 → 消費者価格がF T A以前より上昇。

## 牛肉

- 国内産牛肉の需要減少及び国内価格の下落によって、消費者-生産者-流通業者の余剰と米国産牛肉に対する消費者の余剰は減少。しかし、輸入流通業者の流通マージンは増加。
- ▶ 韓-米F T Aによって、賦課される関税が引き下げられ、米国産牛肉の導入価格が8.8%下落。しかし、輸入牛肉の流通業者の流通マージンはそれぞれ19%、51%増加。

## 豚肉

- 国内産豚肉の需要減少及び国内価格の下落によって、消費者-生産者-流通業者の余剰とEU産豚肉に対する消費者余剰は減少。しかし、卸売-小売段階別の流通マージンは増加。
- ▶ 韓-EU F T Aによって輸入豚肉の導入価格が9.7%下落したにもかかわらず、輸入豚肉の卸売-小売流通業者の流通マージンはそれぞれ17%、50%増加。

資料：李彦か(2013)、pp. 106-116.

31

誰が恩恵を持っていくか。これを簡単に見ると、輸入業者が一番たくさんマージンを取っています。マージンというか利益。国内の流通業者。例えば、生産者なら理解できますよ。消費者の余剰もマイナスになっています。

誰のためのF T Aなのか。

生産者も消費者も得していない、それは大きな問題です。さらには政府も損している。特にこれが問題です。

結論として、F T Aは非常に総合的な効果を持っています。なので、F T Aを結んで、その対策を講じるときは、さっき言ったような人口社会的な要因まで考えて、地道にきめ細かく対策を講じなければ意外な被害が出る可能性があることをお伝えして終わりにいたします。どうもありがとうございました。

(講演Ⅱ：終了)

○会場3 糸島で養豚をやっています。今日、先生のお話を聞きまして、畜産を主に重点的に関心を持ってみていたんですが、T P Pによって日本は、畜産が壊滅的な状態になると言われていますが、先生のこの統計を見る限り、まだ、生産農家の段階の統計はまったく出ていないから分からないのですが、小売価格であるとか、卸売価格というのは、ほとんど変わらなくて、

輸入に関しても3年目だから若干、1.5倍か2倍ぐらいしか増えてないのだろうと思います。不思議に思うのは、流通業者のマージンが意外に高いということと、私は畜産農家から韓国の農家のいろんな状況を農業新聞などで聞いておりますと、壊滅的な状態になっていると聞いています。その割に、消費は伸びているし、あまり変わらないし、小売価格は若干、上がっているし、日本の国内事情とは大きく違うものがあるんじゃないかと、先生のお話を聞いていたら感じるんです。その疑問が1つ。

今さっき話しました、実際、生産農家は、ウシを生産している農家、あるいはブタを生産している農家、どれくらいが3年の間で減少したのか、ちょっと統計が出ていなかったのでお尋ねしたいのですが。

○李 まず、畜産物については、チリから豚肉は増えているのは事実ですが、量から見たらパーセンテージは大きいんですけど、チリからの輸入量自体は大きくないです。だから、韓国全体の豚肉の消費に影響を与えるほどの量ではないです。問題は、これからEUとか、アメリカとか、そういうところからどんどん入ってきたら、あと10年で関税がゼロになります。今、豚肉は関税が22%ですから、10年たったらそれがゼロになる。それから、今より20%ずつぐらい安くなる、そんな感じになります。被害は今より大きいと思います。

問題は、その10年の間、韓国所得も上がるんですよ。それはチリのとき、そういうことが出たんですが、チリからいろんな果物とかが入ってきたら、大きな被害を与えるだろうと思ったんです。実際は、価格は上がったんですよ。なぜなら、その間、韓国の所得が上がって、需

要が増えているんです。だから、入ってもあまり影響がなかった、そういうこともあります。だから、いろんなことを総合的に考えなければならぬんです。しかし、多かれ少なかれ、その効果は出ます。

私はその対策までは触れなかったんですが、韓国の政府としては、大小含めて様々な対策を講じています。例えば、被害産業に対する直接支払制度、やめる農家に対して訓練したり、3年間の所得に準じる、お金を与えたり、そういうことです。一番重要なことは、代替効果をいかにリップするか、それが対策の重要ポイントだと思います。

例えば、日本の場合は非常に国産の品質管理とか、安全性の管理をうまくやっています。その場合、輸入品が入ってきても、代替しにくい環境づくりですね。だから、韓国ももう少しきちんと輸入品との差別化、そして代替しにくい環境をつくるのが、国産市場の最高の方法ではないかと思います。

牛乳など、主に飲料類は外から入りにくいですね。だから、今すでに乳製品はほとんど輸入品に変わっていますが、韓国で飲む飲料類は、韓国産が占めるしかないかなと、なんとかこのまま維持していると。一番危ないのは、北海道産の牛乳です。韓国と日本がFTAを結んだら、北海道産が入ることができると、私はそういうふうに言っています。EUとか、オーストラリアとか、そういうところに。

○司会 まだご質問もありませんかと存じますけれども、懇親会でお願いいたします。

では、李先生、ありがとうございました。

(終了)